

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	桑野先生を想ふ：詩歌
Author(s)	蘇陽
Citation	龍南會雜誌， 1 5 2： 8 9 - 9 0
Issue date	1913-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6292
Right	

酷しく冷わるのに氣がついて、わたしはマントルを頭から被る。秋の夜の川風は、さうと寒く吹いて來て、鬢の後れ毛のやうな草葉をゆるがせる。ひそより返つた川邊の靜寂を排して、力無きさうに蜚がすだいてゐる。淋しく靜かに更けて行く秋の夜の月は朧ろにかすんで、川端に立つてゐるわたしの前には、自分の村、自分の里、自分の家は何も知らぬやうにして幽かに對岸に眠つてゐる。

父、母、兄、嫂、妹、乳母、乳兄弟、及び堪へ難い程頑強な壓迫の觀念——さうしたものを包容した對岸の天地から脱け出たのである。

(篇中の米二なる Mr. S. Haradani に此の拙作を呈す)

——大正二年九月作——

桑野先生を想ふ

二三、乙

蘇

陽

立つ秋の、日は暮れつ、
草も木も人も……、
肌寒き、潮にさふれて、
朝顔や、その果つる姿もあはれ。

風ひとり歔歔りつつ、
濱づたひ、渚をゆくなる、

忠海、細霧の幕に纏はれて、
あゝ翼をさめし親鳥は……、

痛ましき過古の流れを、
さすらひの翼に染めて
今、白みゆく黎明の、
明くるをまたぬ鹿島立ち、

血に叫ぶ籬等を殘して
蒼海の野邊のかなた、

暗黒の冷たき底へ、
只ひとり急ぎゆく、急ぎゆく、

その俤をしのび音に、
ほろほろと

雛は古巢に
泣きつかれ、心亂れぬ。

一とせは、夢の空のごと
あだなれや、

今かへる菊月の
六日の朝、

紫雲は空に廣これど
山邊の旭力なく、

只蟲の音にことよする

月の夕べは悲しびにみつ。

ああ深更、空に流るゝ星の光よ、
音すこく木の葉を叩く時雨よ、
散り敷ける紅葉、

紅葉を染むる血潮の色よ、

淋しき室に漂ふ蟲の聲、時計の音、油のにじみ、
寂莫をやぶる凡ての響よ、
すゝりなく我等が心を、
そも如何にして慰めんとするか。

追悼、二年祭の日、九月廿二日稿

朱

變

三四郎

あわかなるをどめの頬の
大理石の白きほてりに
ぼつくりと揺ぐざばんの
黄金なす葉蔭の外光。

晩秋の日光の放射、
漂へる蝶のもろ羽の
うつゝなき撮み心よ！
果をちぎる刹那の吐息。